

無調整クラウンへの挑戦

東京都技工士会
榊原デンタルラボ
榊原功二

咬合の概念を小補綴装置制作にどのように取り入れれば口腔内における咬合調整を少なくすることが出来るのか、明日から取り入れる咬合器への模型の付着、さらに上顎模型に対する下顎模型の付着、咬合器の調整法などを考えていきたいと思えます。

口腔内における咬合調整の少ない補綴装置制作のときの咬合のとらえ方として技工士も咀嚼器官の役割とは何か、生体に調和した補綴物とは何かを考え、下顎運動に調和した再構成を考えることが重要となります。その基礎となるのが順次誘導咬合であり、1987年にウィーン大学のスラビチェック教授が提唱したもので、この理論はヒトの乳歯の萌出から永久歯列完成にいたる成長発育過程を、顎頭蓋の発達とリンクさせた生理的咬合理論であり、咬合構築のための上下顎関係はアングルⅠ級咬合の獲得を目指します、これは上下顎大白歯における1歯対2歯の関係であり、この重要な咬頭勘合位の維持安定のための咬合のKeyとなるな大白歯のオクルーザル・コンタクトポイントの確立について考察したいと思います。また咬合様式としては犬歯誘導咬合を目指し、強いクレンチングの時臼歯が前歯を保護し、強いグライディングを行ったとき前歯が臼歯を保護するという咬合の基礎であるミューチュアリープロテクション（相互保護）を構築するということでありそのため、歯科技工士は天然歯の咬合面展開角の後方歯から前方歯へと急峻となっている、天然歯の順次性を出来るだけ再現するということがが重要となります。これらの咬合の基礎についても述べたいと思えます。